

## 術前オリエンテーションの実際

—術後の状態がイメージ出来るパンフレットを使用して

5階東病棟

○ 田中 陽加 岸田 安世 山岡 有希 伊藤 和史  
恒石 珠美 尾崎 亜希子 緒方 紀美代 茅原 泰子

キーワード：頸椎手術、術前オリエンテーション、パンフレット

### I. はじめに

術前オリエンテーションには、術後の状況が理解でき回復過程を促進できる内容が必要である。当病棟では頸椎の手術を受ける患者を対象に、昨年術前オリエンテーションに関する研究を行った。その結果、術前の説明だけでは術後のイメージがわからず、術後の状態がわかる説明を希望していることがわかった。今回、術後の状態がイメージできる様にパンフレットを改良し、術前体験を取り入れたオリエンテーションを実施した。その結果、手術直後のイメージができ、不安の軽減につなげることに効果がみられたので報告する。

### II. 研究目的

改良したパンフレットを用いて術前オリエンテーション・術前体験を実施し、その成果を知る事を目的とする。

### III. 用語の定義

術前体験とは、手術後に患者自身が経験する状態を想定し、「実際に使用する道具を用いた動作や体位を体験すること」と定義した。

### IV. 研究方法

#### 1. 調査対象

頸部疾患で手術を目的に入院し、改良したパンフレットを使用してオリエンテーションを実施した患者8名。

#### 2. 調査方法

- 1) 平成16年8月23日～10月5日の期間で、改良したパンフレットを用いて術前体験を取り入れたオリエンテーションを実施する。
- 2) 術後1週間目に独自のインタビューガイドを用いて面談室で聞き取り調査を行う。
- 3) 調査項目は術前体験の内容について4項目、オリエンテーションの内容について3項目、術後のイメージについて1項目の聞き取り調査を行った。

### V. 倫理的配慮

1. 研究の趣旨を説明しインタビューの同意が得られた後に実施する。
2. 得られたデータは研究目的以外には使用しない。
3. インタビューは個室にて30分以内で実施した。

表1 患者から得られた意見や反応の変化

昨年研究	今回の研究	
聞き取り調査から得られた意見	改良したパンフレットを用いた術前オリエンテーションに対する意見や反応	術後一週間目の患者の反応
【術前の看護師への希望】 術後の自分の状態がわかる説明がほしい	介助で体位交換を行うので、ずっと真っ直ぐ寝なくていいんですね	横を向く練習をしていたので動きやすかった 実際枕の当て方が良かった
	自分で横を向いて食事ができそう	横を向いての食事は飲み込みづらかった 寝たまま食べれなかった
	上を向いて寝るのはしんどそう	横を向いて寝れて、しんどなかった
	血抜きが管が入る場所がわかった 安精度に興味があり聞けてよかった	この管が抜いたら動けるんですね 実際は痛みがあって安精度が進まなかった
【砂のう固定】 固定をしているのがわからなかった 安心した 苦しいと思った記憶はない	首が動かせんのはしんどいねえ	多少動けることがわかった やはり圧迫感があった
	固定することが実感できた	実際見るのと違ってしんどかった あまり苦痛でなかった 窮屈感があった
	どんな状態で寝るのかイメージできた	体験していて安心して過ごせた
	圧迫感はないですね	砂のうがあるのがわからなかった
	砂のうが自然にずれたら怖い 耳にあたるのが嫌	苦痛な時は直してもらえた
【装具をつけての感想と希望】 つめる、むれる、圧迫感がある 外すと怖い安心感がある 首を動かしたらいかんとの思いがある どんな装具か知りたかった	食事が摂りづらそう	食事が見えにくかった
	顎がつめて食事がとりづらそう	口が開けづらかった
【術後一番困ったこと】 ベッドが挙げれずしんどかった 食事をどうやって摂るのか心配だった トイレはどうしたらよいか困った	窮屈で動かしにくいですね	横を向いたとき装具がつめて痛かった 手術前に装具をつけていたので感じが分って安心できた
	こんなにベッドを挙げていいんですね	写真で見ていたので寝ていて想像がついた
	横を向いて食べれるんですね	実際は装具もあるし、飲み込みにくく食べづらかった
	便はどうするのですか	ベッドの上では便は出にくかった

VI. 結果 (表1)

前回の術前オリエンテーションは当院の「手術を受けられる方へ」の一般的な用紙を用いて行っていたが、頸椎疾患特有の項目はなく口頭のみで説明していた。術前オリエンテーションで改良した点は、視覚的情報を盛り込んで術後のイメージが湧く説明をすること、術後の状態を想定した体験を盛り込んだオリエンテーションを行うことである。

1. 視覚的情報を盛り込んだパンフレットを用いたオリエンテーションについて

術後の状態がわかる説明をして欲しかったとの声をもとに、術後患者の置かれる状態や環境がイメージできるようなパンフレットに写真を用いた情報を盛り込んだ。主に砂のうによる頭部固定の状態と臥床状態がイメージできること、手術直後の酸素吸入や吸引に関すること、ドレーン挿入がイメージできること、体位変換に関すること、食事や排泄に関することを中心にオリエンテーションを行った。

患者の反応として、「体の向きを変えてもらえるので真っ直ぐ寝なくてもいいんですね」「上を向いて寝るのはしんどそう」「血抜きが管が入るんですね」と術後状態を自分なりにイメージしながらの声があった。食事や排泄に関しては、「横を向いて食べれるんですね」「便はどうするのですか」との反応がみられた。

2. 術後の状態を想定した体験を取り入れたオリエンテーションについて

パンフレットを使用した説明を実施する際、「砂のう固定による臥床体験」「装具装着状態での臥床・ベッド挙上体験」「食事動作体験」「体位変換体験」等を取り入れた。

砂のう固定の体験による反応が多く聞かれ、「首が動かせんのはしんどいねえ」「どんな状態で寝るのかわかった」「砂のうがずれたら怖い」「耳に当たるのは嫌だな」等の表現があった。

装具の装着体験では「食事がとりづらそう」「顎がつめる」「窮屈で動かしにくい」との反応があった。

体位変換の体験では、「介助の必要性が理解出来た」「こんなふう動くのかと実感した」「横を向いて食事が取れそう」との表現があり、「真横より半側臥位がいい」「後ろも完全に固定してほしい」と自分にとって楽な体位を表現する反応もあった。

3. 術後一週間後の患者の反応について

術前に描いた術後のイメージと違って事として、「寝て食べる事が出来なかった」「パンフレットは簡単そうだったが術後は違っていた」「思ったより食事が食べれなかった」と表現していた。

体験した内容に対する反応に関しては、術前装具装着体験で、「食事が見えにくい」「口が開けづらい」「手術前につけていたので安心できた」と表現し、砂のう固定の体験では、「多少は動けると思った」「安心した」「体験していてよかった」「窮屈感があった」、そして体位変換の体験では、「パンフレットを見ていたので受け入れやすかった」「楽であった」「実際は枕の当て方が違った」と表現していた。

#### 4. 術前オリエンテーションで印象に残っている内容について

術前では、「砂のうで固定した事」「介助で体位変換を行った事」「側臥位で食事摂取をした事」が印象に残っており、術後の状態について実際に、「砂のうでの固定は安心した」「横を向く練習をしていたので動きやすかった」「飲み込みづらかった」等が印象に残っているとの回答が得られた。

#### 5. 術前体験について

術前に体験した内容について、「砂のう体験」「装具装着体験」「介助での体位変換の体験」は安心感が得られ役に立ったとの表現や、「文章だけでなく写真や体験がよかった」「自分で動いたらいけない事がわかった」との表現も得られた。

#### 6. 術前オリエンテーション後の術後のイメージについて

「砂のうを置く事や食事を摂る方法がイメージ出来た」「こんなふうになっていくんやとイメージできた」「ベッド上で動いたらいけない事」「手術のあとのイメージが出来た」「術後の自分の置かれる状況が分かった」等の表現がみられた。

### VII. 考察

鎌田ら<sup>1)</sup>は、「高齢者に学習効果を向上させるためには、視聴覚教材を使用することは老人の特性を踏まえた上で有効である」と述べている。

口頭での説明だけではイメージできにくい術後の状態を、写真入りのパンフレットを用いて視覚的情報を盛り込み、実体験を取り入れた事で術後イメージが沸きやすく、直接的に役に立った部分が多かった。以前のオリエンテーションでは必要物品だけが記憶に残っていたという結果であったが、今回は『体験』という部分が印象に残っていた。視覚・聴覚による情報と体験を組み合わせることで、患者にとって術後の状態がイメージしやすいオリエンテーションとなったと思われる。

術前オリエンテーションは入院時から手術を意識した関わりが大切であり、患者の個別性を尊重し一人一人にあった方法で進めていかなければならない。患者に合わせてその都度説明を加えたり、『体験』を行った事により不安内容も具体化され、術直後に自分の置かれる状態がイメージできた事が、「体験してよかった」「安心した」という言葉の表現につながったと考える。

入院時からの関わりを大切に、手術を受ける患者・家族の不安を軽減するためのひとつの方法として今回実施したオリエンテーションは有効であったと考える。

### VIII. 結論

1. 写真入りパンフレットを使用し、視覚的情報を提供する事は術後のイメージ作りに効果があった。
2. 見て、聞いて、体験することにより不安が具体化され、説明を加える事により不安の軽減につながった。

### IX. 終わりに

今回作成したパンフレットを『見て、聞いて、体験して』と命名した。

今後も患者・家族の手術に対する不安に耳を傾け、効果的なオリエンテーションが実施できるよう、個々にあったオリエンテーション内容を検討し援助をしていきたい。

### 引用・参考文献

- 1) 鎌田ケイ子他：新版看護学，メディカルフレンド社，335，1992.
- 2) 白木正孝：高齢者の生理学特徴、臨床看護，18 (9)，2，1992.
- 3) 及川千恵：老人患者の特性と観察の視点，看護実践の科学，23(9)，24-29，1998.
- 4) 林カオリ：全身麻酔手術後の急性錯乱症状の軽減 - 術前オリエンテーションにスライドを導入して - ，日

本看護学会論文集（老人看護），30<sup>th</sup>，60-62，1999.

5) 井上智子：周手術期看護の新しい考え方とエビデンス，月刊ナーシング，23(8)，18-26，2003.

6) 加藤マサミ他：高齢者患者に手術後の経過をイメージづけるためのビデオの効果，日本看護学会論文集（老人看護），33<sup>rd</sup>，44-46，2002.

〔平成17年3月5日 高知県看護協会看護研究学会にて示説発表〕